

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25420680

研究課題名(和文) モルディブ諸島他の歴史的建造物調査 インド洋建築史の基盤形成

研究課題名(英文) The Survey of Historical Monument at Islands as Maldives; Formulation for the Basic Grounds for the Architectural History of Indian Ocean

研究代表者

深見 奈緒子 (FUKAMI, NAOKO)

早稲田大学・イスラーム地域研究機構・その他(招聘研究員)

研究者番号：70424223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：モルディブ諸島の珊瑚石モスク26棟の調査と既往のインド洋周域調査および文献から、モルディブのイスラーム建築について以下5点が判明した。
それらは、1)モルディブの珊瑚石モスクの独自性、2)1000年以上前スリランカやインドから到達した仏教・ヒンドゥー教文化からの影響、3)12世紀以後、西の乾燥地から到達したイスラーム文化の影響、4)東から到達した熱帯木造文化の影響、5)1000kmにも連なるモルディブ諸島全体の建築文化の一様性である。これらが、連関しながら環礁モルディブ特有の珊瑚石建築文化を創出したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Following five points are clear from the field survey of 26 coral historical mosques in Maldives, the field surveys which was done until 2013 and the previous studies. Maldivian Islamic architecture have 1) the uniqueness of the coral mosques, 2) the influence of Buddhist and Hindu architectural culture more than thousand years ago from Sri Lanka and India, 3) the influence of Islamic architecture since the twelfth century from Middle East, West Asia and West India as arid zone, 4) the influence of wooden architectural culture from the eastern tropical regions like Bengal bay area or Southeast Asia, 5) the uniformity of the architectural culture all over Maldives ranging thousand kilo meters. As these points are correlation with each other, the unique Maldivian Islamic architecture made by coral stones was established relating the geographical peculiarity of atolls.

研究分野：イスラーム建築史、インド洋建築史

キーワード：モルディブ 建築文化 伝播・受容・定着 イスラーム 珊瑚石 モスク 離島 環礁

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、ユーラシア大陸の主として大陸内部に存在するイスラーム建築の歴史に関する研究を続けてきた。2001年1月のインド震災以来、西インド洋に面する歴史的港市パドレシュワル(グジャラート州)の文化遺産を軸とした復興研究に端を発し、インド洋海域の建築文化へと研究を発展させた。2008~2010年度「インド洋海域世界における港市の形成と変容に関する調査研究(研究代表者・山根周)」2011~2014年度「インド洋海域世界における港市の空間的連関・伝播・融合・転成に関する研究(研究代表者・山根周)」の研究分担者として参加し、東アフリカ沿岸部から東南アジア島嶼部にいたる地域の調査を続けてきた。

しかしながら、モルディブ諸島をはじめ大陸から離れた島の建築遺産に関しての既往の研究蓄積は不十分な状況であった。

(2) 当初は、インド洋全域を対象とし、イスラーム建築の残るニコバル・アンダマン(インド)、ソコトラ(イエメン)、コモロ(東アフリカ)も対象にする予定であったが、島嶼部調査には、時間的・経済的な負担が大きく、またイエメンの情勢不安定もあり、実施には至らず、モルディブ諸島に焦点を絞った。ただし、研究代表者がすでに調査したことのあるスワヒリ地方の島嶼部、ペルシア湾岸の島嶼部等のデータも使用した。

2. 研究の目的

(1) インド洋海域島嶼部に残るイスラーム教徒のモスク、墓建築、宮殿建築をリスト化し、建築技法と様式の伝播、受容、折衷を明らかにすることが本研究の目的である。

(2) 従来の「イスラーム建築史」の枠組みを越えるために、インド洋周域に存在する多様な宗教建造物、伝統的住宅建築との比較を行い、インド洋からみた建築史を構築することである。

3. 研究の方法

文献等から情報を収集するとともに、現地踏査を行い、写真撮影、図面採取、聞き取りを行った。それらをまとめてリスト化するとともに、考察を行い、論考を発表する。

モルディブ諸島の歴史的な珊瑚石モスクについて、既往研究にある21例から11例の踏査を行い、踏査により新たに4例の小規模珊瑚石モスクと、1棟の石造モスクを加え、既往研究と合わせて26例を記述・分析した。加えて、すでに調査したインド洋沿岸部のモスク建築、大陸部のモスク建築を比較した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

モルディブ諸島は、インド洋に南北1000kmに渡って連なる諸島で、その構成は小さな島が環状に連なる環礁の形をしており、26の環礁、1200の島々からなる。この地理的様相は

モルディブの建築文化と多分に関わっている。モルディブの歴史的建造物の調査を通して、以下の点が明らかになった。

第一に、大陸からの距離に応じて、大陸の建築文化の影響の差異があり、大陸からの距離が400km以上になるモルディブ諸島では独自の文化が培われたことが最も重要である。この点は、ホルムズ島をはじめとするペルシア湾岸の島々、インドの西側のマラバール海岸に面する島々において、大陸の建築からの影響が顕著な点と際立って異なる。無論、大陸からかなりの距離をおくモルディブ諸島へもイスラーム教、古くは仏教やヒンドゥー教など文化や宗教の伝播は認められるが、材料が大きなファクターとなる建築文化においては、ココナツヤシと珊瑚石を用いた内的な発展が主軸となった。

その様相は、海から切り出した珊瑚石で壁を造って精細な彫刻を施し、上部を木造架構とする他の地域に類例のない建築である。またモスクにおいてメッカの方角を指し示すミフラブ(アーチ型の目印や窪み)は、他の地域においてはほとんどのモスクに必ず設置される必須な装置であるにもかかわらず、モルディブにおいては意図的にミフラブを取り付けない珊瑚石のモスクが多い。また、ミフラブ室(ミフラブ・ゲ、図1の灰色部分)と呼ばれる再奥部の部屋を設けることも特殊で、そこにもアーチ型の目印を設置しない場合もあり、ミフラブという認識はありながら、アーチ型の装置を用いておらず、文化の独自性を物語る。

第2に、離島とはいえ、大陸から伝播したものがあり、一旦モルディブ風に咀嚼され、定着した技法や様式は、たとえ宗教が変わっても継続される傾向が強い。すなわち、モルディブでは1000年以上前の伝統が、珊瑚石モスクに根付いている。

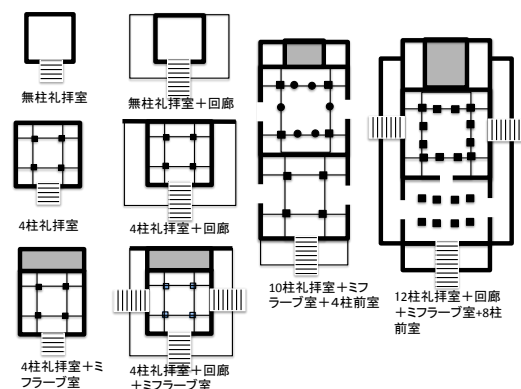


図1. モルディブの珊瑚石モスクの平面

例えば、対象としたモスク群の建設年代は最も古い例でも15世紀でほとんどは17世紀以後であるが、平面形には無柱の正方形平面の一室だけの単純なものから、正方形平面(部屋に柱を配する場合もある)を主軸方向に重ねその周囲を回廊で囲んだ複雑なものがある。その進化の基盤には、主軸方向(モ

スクなのでメッカの方角)への展開が認められる。こうした傾向は、北インドや中東のモスクには見られず、モルディブの基層文化となった仏教やヒンドゥー教の寺院からの影響が強いと推察される。モスクが、仏教のストゥーパやヒンドゥー教寺院に顕著な凹凸を繰り返した装飾的な水平帯基壇の上にある点や、格間装飾を用いる点もその一つである。この伝統は、南インドやスリランカから西暦 500 年頃から 12 世紀半ばまでの間にもたらされたものである。

第3に、歴史的モスクが建設された同時代にイスラームを経由して西アジアから移入された技法や様式が特異な発展を遂げて定着する場合があります。第2の影響と同様に、選択的な受容がなされ、特異な発展をとげる。第2の文化定着が宗教と時間を越えた存在であるのに対して、第3の文化定着はイスラームという宗教の中で起こった事象で、古くともモルディブにイスラームが到来した 12 世紀までしか遡れず、またその源泉は中東、西アジアもしくは西インドである。

その例として、アラビア語のインスクリプションや壁面のアラベスク文様があげられる。珊瑚石に刻まれる場合と木彫、木彩色の場合があるが、いずれも大陸からの伝播要素であるにもかかわらず、他の地域にはないモルディブ特異の発展が見られる。

また、アーチ型の内部に鍵を描く文様は、11 世紀以来、西アジアでミフラーブのアーチ内にランプを描く文様であったが、これがインドのグジャラート地方に伝わり 14 世紀にランプの形を変え、あるいは香炉を描くようになる。これが、さらにモルディブ諸島へと伝わった際にランプが鍵に変わったものであることが推察された。光を灯すランプ、芳香を醸す香炉、貴重なものを守る鍵付き扉は、いずれもイスラームの聖典クルアーンで重要視されるもので、思想が伝わる際に表現形態を変容させた例として注目できる。

第4に、東南アジア等、木造文化を主体とするインド洋の東海域から伝わった技法が、第2や第3の影響と同様にモルディブ特異発展を遂げた点があげられる。その例には、轆轤細工、赤と黒のラッカー技法、井桁状の架構方式、引き戸などがあげられる。

珊瑚石の壁体にのる上部架構に関しては、梁組の上に束をたて傾斜屋根を載せる形式ながら、平天井によって架構が隠されている点と、本来ヤシの葉葺の屋根が鋼板に変わってしまっている点から架構自体の実年代を見極めることは難しい。平面形が進化し、正方形のユニットを重ねて全体が長方形になった場合(図1. 右の2例参照)、長方形平面全体を大屋根で覆っており、これらはインド南部のケーララ地方などとの共通性も認められる。また宗教建築を超えて民家建築との関連も考えねばならない。

生態系を同じくする地域からの建築文化の影響は、西アジア等の乾燥地域からの第3

の影響とは異なり、現在ではその遺構は失われてしまっているが、第2に指摘した伝播と同様に、イスラーム到来以前からの影響があったのかもしれない。

第5に、第1に指摘した文化の独自性と、第2から第4で指摘した選択して取り入れた技法や様式への固執性が、モルディブ特有の珊瑚石モスク建築を作り上げた。その様式が、1000kmにもわたる環礁に共通した文化を形成している点が5番目の文化的特徴で、第1に指摘した点と呼応する。モルディブではイスラーム以前からモルディブ語が話され、ベデヒ文字があり、仏教、ヒンドゥー教、イスラーム教と宗教は変容しながらも一つの文化圏を作っていた。

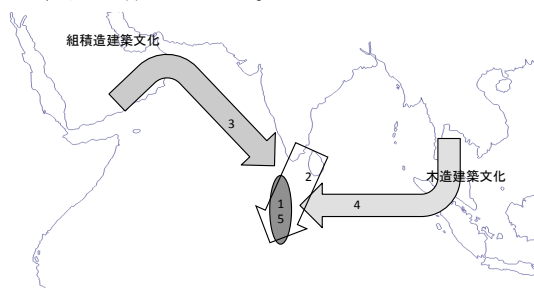


図2. モルディブの文化

- 1 モルディブ文化の独自性
- 2 基層文化としての仏教、ヒンドゥー教
- 3 イスラームを介した文化の移入
- 4 熱帯気候帯からの文化の移入
- 5 モルディブ文化圏の一様性

環礁という1平方キロにも達しない島々が環状に連なる幅30~50kmの領域を超えて、深海を挟んだ相互の環礁間での建築文化の伝播と普及には、大陸や大陸近傍の諸島では考えられないネットワークが存在したと推察される。本研究では、珊瑚石切り出しの時期や環礁を超えた運搬の範囲なども聞き取ることができ、生態系に準じた文化伝播の様相が明らかとなった。

建築文化を考える上で、材料とそれに即した構法など、土地に根ざしたものが大きな役割を占める(第1)。しかしながら歴史とともに、モノ、ヒト、情報が伝播し、その状況は変容する。モルディブの珊瑚石モスクでは、他の土地の様式や技法をそのまま写し取り、モルディブの文化として取り入れたことはなく、様式や技法が細分化され、かなり選択的な受容がなされ、さらにモルディブ特有の発展を遂げた。建築文化の伝播と受容には、宗教を超えて引き継がれたものがあつた点(第2)、宗教も一つの伝播経路として重要である点(第3)、建築材料とその構法から生態系が重要な役割を果たした点(第4)にも留意せねばならない。このようにして形成された建築文化が、一つの島、あるいは一つの環礁に限らず、多数の環礁からなるモルディブ諸島という領域の中で一様性を持つにいたつた点(第5)が本研究で明らかとなった。

(2) 得られた成果の国内外における位置付け
インド洋における離島、およびモルディブの建築文化に対する研究蓄積は、世界的にも未だなされていない。本研究によって、作成した図面、撮影した写真は貴重な資料となると考える。また、モスクというイスラーム建築から始め、従来のイスラーム建築という枠組みを超え、インド洋建築という視野を開いた点は新機軸であると自負している。

国内においては、日本オリエント学会、文化遺産国際協力コンソーシアム、早稲田大学イスラーム地域研究機構、人間文化研究機構のネットワークなどにおいて、本研究成果を発表し、いままで建築文化に対して関心が薄かったモルディブ地域に対する意識を喚起した。

海外においては、調査前にライデンでインド洋建築文化について発表した。

(3) 得られた成果の国内外におけるインパクト

本研究を基盤に、研究協力者であるマールーフは、*Coral Stone Mosques of Maldives: The Vanishing Legacy of the Indian Ocean*, Gulf Pacific Press, 2016 (モルディブ諸島の珊瑚石モスク-インド洋の消えゆく遺産、ガルフ・パシフィック・プレス) をまとめ、出版した。本著では、本研究以前のマールーフの研究に加え、本研究での調査資料、研究代表者の意見を反映したものであり、本研究のインパクトのひとつと言える。

本研究におけるモルディブ調査を機に、日本とモルディブとの文化財協力に関して2つのインパクトがあった。

一つは、モルディブにおいては、12世紀にイスラームが到来する以前に仏教やヒンドゥー教が普及していた。しかしながら、現在モルディブの国民ほぼ全員がイスラーム教徒で、基層文化遺産は重要視されていない。2012年には政権交代によりマールエの博物館が襲撃を受け、ヒンドゥー教や仏教の遺物が破壊された。このような状況を少しでも改善するためにと、ユネスコ・アジア文化センターの「文化遺産の保護に資する研修2015(個別テーマ研修)」の博物館学に関する研修への推薦依頼を受け、ウマイル・バデーウ氏(Mr. Umair Badheeu)を推薦した。彼は、現在モルディブの私設のリゾートで発掘と博物館化を進めている人物で、2015年11月10日から12月8日まで日本において、博物館学の実習を行い、モルディブに戻り、発掘事業を続けている。

もう一つは、モルディブ政府遺産局から、世界遺産暫定リストである首都マールエの「旧金曜モスク(Old Friday Mosque)」の修復・修理に関する専門家の派遣・紹介に関する要望が公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センターに寄せられ、現在協力の可能性を模索中である。

(4) 今後の展望

まず第1に調査の継続性が望まれる。冒頭にも記述したように、本調査によって離島調査の難しさを実感した。島と島をつなぐ公共交通は疎らで、しかも波が高いと運行は延期される。またモーターボートなどプライベートな移動にはかなりの経費がかかる。したがって、時間と経費の折り合いを見出さねばならない。しかしながら、離島ゆえのリゾート観光開発が続く中で、今回の研究で調査できなかった島々については、建築遺産が消失する前に調査を通じて遺産の状況を記録し、さらには保存へと繋げていかなければならない。

この危機的状況を知らせるものとして、すでに消失し、新建材のモスクへと建て替えられた珊瑚石モスクもある。また本研究ではモニュメントを扱ったが、伝統的居住様式は、すでに新たなものに置き換わってしまった。町や村の構成はグリッド状に改変され、民家はコンクリートブロックなどの新建材を用いてすべて建て替えられた。本来は壁と屋根をヤシの葉で葺いた高床式の住居が、不規則に並んでいたことが20世紀諸島の写真からわかる。いわゆる伝統的居住様式は、リゾートの海辺の四阿に残されるのみである。

また、モルディブにおいては先述したように仏教やヒンドゥー教など過去の宗教遺産に対する認識が極めて低い点も問題である。

こうした状況は、本研究において調査できなかったニコバル・アンダマン、ソコトラ、コモロ諸島などにも同様であることが推察され、早急にインド洋沿岸島嶼部の調査へと発展することが課題となる。

第2に、研究協力者モハメド・ソリマンと協力して、エジプトを含め、水施設に注目したことにより、研究の新たな発展性を見出すことができた。紅海、スワヒリ沿岸部にも珊瑚石を素材とする建築文化がある。スワヒリ沿岸部の珊瑚石モスクについては、すでに調査を行ない、モルディブの珊瑚石モスクとは異なる系譜の建造物として位置付けたが、紅海の珊瑚石建築の実地踏査は、今後の課題である。また、港の必需品としての水施設に注目してインド洋を見直すという点も新たに覚醒された点である。残念ながらモルディブ調査においては、モスクの井戸や沐浴施設は別として、港の水施設を見出すことはできなかったが、より広いインド洋周域で、宗教建築を超える施設として重要であると考えられる。

第3に、インド洋建築史を紐解く中で、一つの建築文化圏としてのモルディブという領域が明らかで、西と東からの歴史的伝播を受けながら文化を形成してきた。今までに明らかにしてきた、マラバル(インド西海岸)、コンカン(インド東海岸)、スリランカ、ベンガル湾周域、インドネシア諸島などの領域に加えることができる。これらの関わりを明らかにしていくことが必要である。

特に、スマトラ島を始めとするインドネシ

ア諸島の調査は重要であると考えるが、いまだ実現していない。特に、研究代表者は従来イスラームの施設を研究してきたので、ヒンドゥー建築、仏教建築の研究者とネットワークを作りながら、インド洋建築史を作り上げることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ①Naoko Fukami, The Use of Muqarnas in the Transitional Zone of Domes in Egyptian Islamic Architecture, *Orient* (エジプトのイスラーム建築の移行部におけるムカルナス、オリエント) 査読有, Vol. 52, 2017, pp. 93-120;
- ②Naoko Fukami, Bhadreswar from Medieval Port City to Modern Town, *Islam and Multiculturalism: Islam in Global Perspective*, (中世の港市から近代の町へ変容したバドレシュワル、イスラームと多文化主義-グローバルな視点から見たイスラーム) 査読無 2016, pp. 62-74
- ③深見奈緒子、インドの中世イスラーム建築史、*NIHU 地域間連携研究の推進事業*、査読無、No. 9、2016、pp. 1-39
- ④深見奈緒子、ミフラーブ紀行、*早稲田大学イスラーム地域研究機構ジャーナル*、査読無、No. 8、2016、pp. 3-11
- ⑤深見奈緒子、モルディブのサンゴ石モスク、ヘレニズム～イスラーム考古学研究、査読無、2015、pp. 152-172 ;
- ⑥深見奈緒子、イスラーム建築の美と生活空間の創出、*イスラーム科学研究*、査読無、第10号、2014、pp. 83-92 ;
- ⑦ Naoko Fukami, Historic Mosques in Southeast Asia, *Islam and Multiculturalism ; Coexistence and Symbiosis*, (東南アジアのモスク、イスラームと多文化主義-共存と共生) 査読無、2014、pp. 91-102
- ⑧深見奈緒子、転用材と新材、ヘレニズム～イスラーム研究、査読無、2013、pp. 147-164 ;
- ⑨深見奈緒子、南アジアの中世イスラーム建築史、*イスラームとインドの多様性-NIHU 地域間連携研究の推進事業*、査読無、No. 4、2014、pp. 27-54

[学会発表] (計9件)

- ①深見奈緒子、組積造への全球的視野、居住研究会、2016年5月19日、東京大学生産研究所(東京都・目黒区)
- ②深見奈緒子、ミフラーブにおけるランプ文様の変遷-西アジアからモルディブへ、第57回オリエント学会大会、2015年10月18日、北海道大学(北海道・札幌市)
- ③深見奈緒子、モスクにあらわれた環インド洋の文化交流、人の移動と居住文化研究会、

- 2015年3月7日、建築会館(東京都・港区)
- ④深見奈緒子、モルディブにおける文化財保存の現状、文化遺産国際協力コンソーシアム、2015年2月6日、東京文化財研究所(東京都・文京区)
- ⑤深見奈緒子、危機に曝される歴史的イスラーム建築、イスラームの乱と静、2015年1月30日、早稲田大学(東京都・新宿区)
- ⑥Naoko Fukami, Medieval Port-Cities in Gujarat, India through Muslim Monuments, International Conference: Patterns of Early Asian Urbanism (イスラーム建築を通して見たインド・グジャラート地方の中世の港市、初期アジアのアーバニズム) 2013年11月12日、ライデン国立博物館(オランダ)
- ⑦ Naoko Fukami, Historical Mosques in Katiawar, Preservation and Utilization of Historical Buildings, (カティアワールの歴史的モスク、歴史的建造物の保存と利用) 2013年10月24日、京都大学(京都府・京都市)
- ⑧深見奈緒子、転用材と新材-カティアワールの中世イスラーム建築から、ヘレニズム～イスラーム研究会、2013年7月7日、檀原考古学研究所(奈良県・橿原市)
- ⑨深見奈緒子、シーア派の建築-インド洋海域をめぐる調査から、シーア派ネットワークの展開と近世アジア世界の再検討、2013年6月25日、東京大学(東京都・文京区)

[図書] (計3件)

- ①深見奈緒子、X-Knowledge、世界の美しいモスク、2016、163p
- ②深見奈緒子訳、フリードリヒ・ラゲット著、マール社、アラブの住居、2016、304p
- ③深見奈緒子、岩波書店、イスラーム建築の世界史、2013、276p

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深見奈緒子 (FUKAMI, Naoko)

早稲田大学イスラーム地域研究機構・招聘
研究員

研究者番号：70424223

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

Mauroof Jameel (マールーフ・ジャメール)

マラヤ大学・研究員

真道 洋子 (SHINDO, Yoko)

東洋文庫・研究員

Mohamed Soliman (モハメド・ソリマン)

考古省・コプトイスラーム部門長

辻村 純代 (TSUJIMURA, Sumiyo)

国士舘大学・研究員